

文化祭を鑑賞して 〜〜〜〜〜〜 校長 三輪 秀文 〜〜

今年で26回目を迎えた文化祭。今年は、昨年までとちがって、1年生から3年生までが学級劇に取り組みました。本校では初めてのことなので、1年生が学級劇を仕上げることができるのかどうか、ちょっと不安を抱いていました。そして、上級生が1年生の学級劇をきちんと鑑賞するのだろうかという心配もありました。しかし、それは取り越し苦労に終わりました。むしろ、全校みんなの鑑賞態度が、ステージ上での一生懸命で、真剣な発表をつくり出していたと言っても過言ではありません。



演技に対する笑いも、決して冷ややかなものではなく、嫌みがなくて、温かいのです。全校が一体となった体育館で生じる笑いや拍手を、本当に気持ちよく、好感を持って受け入れられた文化祭でした。

文化祭が終わったあと、ある女子生徒が校長室に訪ねてきて、「失敗してしまった〜」と残念そうに語り出しました。話を聞いていると、スポットライトをキャストにあてるタイミングをはずしてしまったということです。私は、「全然気づかなかったよ」と返したのですが、「そうかな?」と不服そうに校長室をあとにしました。

実は、私はその話を聞いていて、とてもうれしい気持ちになりました。ステージに上がるキャストだけでなく、クラス全員の真剣で、ひたむきな姿勢で学級劇が完成していることが伝わってきたからです。主役は、クラスの一人ひとりなんだと実感した瞬間でした。



学級劇のよさは、クラス一人ひとりの長所がそれぞれの部門で活かされることです。絵の上手な人は背景画を、音楽に興味のある人は音響を、そして、パフォーマンスの得意な人はキャストをなどと、一人ひとりの個性がいたるところで活かされるのです。ですから、学級劇は、キャストだけが目立っているようですが、音響や照明、そして、大道具や衣裳、小道具などの裏方の努力に支えられてはじめて、完成することができる総合芸術なのです。それに、学級劇は、一つの作品をステージ上で表現するわけですが、



物語としての作品以外に、10月下旬までいろんなことが繰り返された、そのクラスの物語そのもののが表現されているのです。担任とそのクラスの子どものノンフィクションのドラマなのです。「あの背景画は、あの生徒たちの手によるのか...」「あの生徒があんな役でがんばっているのか...」というふうに、クラスの物語そのもののような気がします。私は、そんな学級劇の取り組みに触れ、ステージ上にクラスが凝縮

された物語を見るのが大好きです。

ここで紹介するのは、私が、文化祭の取り組みを通して知り得た、ほんの一部に過ぎません。もっと紹介しなければならない感動的なエピソードや、学級劇を陰で支えてきた人たちがいるはずです。すべて紹介できないことをお許しください。

1年生の部

1年1組（玉木学級） 『幽霊学校』

背景の完成度も高く、夜の学校の雰囲気もうまくつくり出されていました。セリふを言うときに、みんなが正面を向き、しっかりと発声できていたので、体育館の後ろまで声が通っていて、ストーリーが理解しやすい劇に仕上がっていました。それに、みんなセリフをしっかり覚えていて、劇のテンポも大変によく、1年生の学級劇のお手本になるような、そんな『幽霊学校』でした。



1年2組（百本学級） 『マイライフ』

シンプルな抽象画を背景に、落ち着いた主演の演技で幕が開け、2年生の発表かと見間違えるオープニングでした。ガリ勉型や追っかけ型などのキャラクターをよくつかみ、それを上手に演じていたのが立派でした。それに、マイクを通してしか登場しませんが、天からの声は、情のこもった語りが素晴らしく、劇全体を引き立てていたように感じた『マイライフ』でした。



1年3組（吉田学級） 『権蔵太鼓』

今年の文化祭では、唯一の民話劇でした。効果音を手を使って、1年生とは思えない舞台効果を出していました。太鼓を守り抜こうとする権蔵と、陰険な村人たち、そして、庄屋の息子と娘のかわいらしい演技が見事に調和した、ほのぼのとした民話劇でした。ほんの少ししか登場しませんが、龍の化身役の演技のうまさや、権蔵の堂々とした演技が光っていた『権蔵太鼓』でした。



1年4組（道岸学級） 『悪ノ召使』

立体感のある背景画は、とても丁寧に描かれ、1年生の作品とは思えないくらい立派なものでした。キャストの動きがすっきり整理されていて、見やすかったです。また、兵隊たちの格闘シーンで使われていた手作りの刀も、しっかりつくられていて、演技を引き立てていました。大道具や小道具などの裏方さんたちの努力が、十二分にステージに現れていた『悪ノ召使』でした。



2年生の部

2年1組(藤木学級) 『転入生』



学級シーンの表現は、机や椅子が並び、登場人物が多くて演出がとても難しいのですが、一人ひとりの声がよく出ていたので、ストーリーがわかりやすく仕上がっていました。また、場面転換でも、ドタバタすることなく、劇がスムーズに流れていました。いじめっ子やツッパリグループも上手に演じられていましたが、男女が入れ替わった二人も照れることなく、コミカルに演じていた2年生劇らしい『転入生』でした。



2年2組(樹山学級) 『風、風吹くな』



立派に文化祭第1日目のとりを努めた2年2組です。赤ずきんちゃんとおばあちゃん、そして、オオカミに扮したキャストのやりとりがテンポよく、セリフもはっきりしていて、学級劇の典型のようなステージに仕上がっていました。シリアスで深刻そうな赤ずきんちゃんの問題を、妖精たちのはきはきしたセリフと演技によって、うまくファンタジー世界に閉じこめることに成功した『風、風吹くな』でした。



2年3組(玉田学級) 『グッドバイ・マイ・・・』



何のために人間は生まれるのかという難しいテーマを、シンプルな舞台セットと、場面転換のないステージで表現するのは大変だったと思います。黄、青、桃色、緑、そして、白と黒というふうに視覚的な効果を出す工夫がなされていました。それに、劇の基本通りに、正面を向いて、丁寧にゆっくりセリフが表現できていたので、ストーリーがわかりやすい『グッドバイ・マイ・・・』でした。



2年4組(冨田学級) 『ジグソー』



なかなかの熱演で、四中文化祭の大事なオープニングの役割を、十分に果たしてくれました。体育館に響き渡る澄み切った発声の主演に、コミカルで、表現力豊かな悪魔役と魔女役の二人がほほえましく絡み合って、体育館に温かい笑いを生んでいました。背景の抽象画風の時計が動くのに驚いてしまいました。大道具の引き上げのすばやさも見事な『ジグソー』でした。



わかたけ学級（牧学級） 展示

今回の文化祭では、PTAのコーナー、そして、各学年の美術の授業での作品展示と並んで、展示発表を行ったわかたけ学級でした。日頃の学習の成果が、わかたけ学級で整然と展示されていました。お昼の展示発表の時間帯には、多くの生徒が来室して、丁寧に展示を鑑賞していました。美術コーナーとわかたけ学級の展示は、しばらく見ることができるので、ぜひ訪ねてください。



3年生の部

3年1組（高木学級） 『アニー』

歌あり、踊りありのミュージカルは、クラスみんなで楽しんでいる様子が伝わってきました。劇中での踊りが、効果的に配され、しっかり踊りきっていました。男性に扮したキャストの迫真の演技は、宝塚のステージを彷彿させるものでした。一人ひとりの名演は、やはり1年生、2年生の参考となるようなミュージカル『アニー』だったと思います。



3年2組（森岡学級） 『永遠のきずな』

さすがに3年生！という印象で、二日目のトップを飾ってくれました。明るいとこると、悲しいところのコントラストが上手に表現され、断ち切れない人間関係がテーマとしてしっかりと表現されていました。学級シーン、修学旅行の宿舎シーン、病院シーンと、場面転換が多かったのですが、大道具の出し入れもスムーズで整然としていて、見応えのある『永遠のきずな』に仕上がっていました。



3年3組（西村学級） 『五番目の願い事』

大道具や衣裳、音響、照明、そしてキャストと、クラス全員の努力がステージ上にあふれていました。セリフを言っていないキャストのさりげない演技が上手に表現されていて、劇に絶えず動きを生じさせていたのが、劇の完成度を高めていました。みんなが登場人物のキャラクターをよくつかみ、クライマックスのエンディングへのもっていきかたもうまく、思わず涙がこぼれそうな『五番目の願い事』でした。

